

## Jacquemin, Raphaël

*Iconographie générale et méthodique du costume du IV<sup>e</sup> au XIX<sup>e</sup> siècle (315-1815), collection gravée à l'eau forte d'après des documents authentiques & inédits.*

Paris, L'auteur, [1863-1869], 1 portfolio (200 plates, copper hand col.). 44×32cm. <K383. 1-J> 文献番号 3-4

Hiler p. 473    Colas 1528-31    Lipper. 337

ジャクマン『4世紀から19世紀(315年-1815年)までの服装の全般的体系的参考図鑑, 未発表の確かな遺物に基づく腐蝕銅版図集』

19世紀後半は服装史文献の黄金期である。わけでも1860年から1880年代にかけては大型の図版集や多巻物が続々と刊行されている。ラシネ(A. Racinet)の『服装史』(文献番号3-6)もその代表的な著作である。この期のこうした大著に共通していることは、著作の資料源を過去の遺物である彫像、貨幣、印章、壁画などに求め、そこから衣服に関連のある図像を数多く採取し、大型の図版集にまとめている。すなわち、この期の著作は、まず第一に事実の丹念な収集に重点がおかれており、大方の著作は服装史の文化史的な考察がなされるまでにはまだ至っていない。図像の収集にしても衣服だけではなく、収集された生活関連の様々なものが混在し、「服装史」は「風俗史」の一部として扱われていることが多い。そのなかで本書はこれまでの風俗史の枠から抜け出て服装そのものに視点を置いて著された初期の著作といえるだろう。それだけにこれまでの図版集とは異なり、余計なものは取り除かれ衣服や装飾品が鮮明に描き出されている。

本書の内容は4世紀から19世紀までのヨーロッパの各時代の衣装を描いた彩色服飾図像集で、縦44センチ×横32センチのフォリオ判、大判の画面に人物一体(後半になると二・三体のものも見られる)が大きく描かれている。絵は線画のように簡潔であるが、ディテールは細部まで描かれており、衣服の外観や衿、袖などのかたちや仕組みの細部は明確でわかりやすい。本書の特徴はこの大きな図像と簡潔な画法にある。

図版の構成は1~6が古代、7~57が中世、58~183が近代、184~200が東洋になっている。文字による情報は第1巻にある標題紙と総目次のみで序文・解説はなく、頼りにする標題紙にも発行年の記述がない。そこで書誌により本書の書誌の変遷を調べた。

プレート枚数、形体等から本書は初版であることが確認された。1872年には80枚のプレートが補遺版としてパリから刊行された。第2版は1900年頃、初版と追補の図版を合わせた280枚で同じくパリから刊行されている。第3版は1910年(推定)に281枚の図版でパリから刊行されている。また、1879年には『4世紀から12世紀までの西洋の市民服・宗教服・武装』(文献番号3-35)という書名で本書の一部が再刊されている。

著者ジャクマン(1821-1881)についての詳細な調査は出来なかったが、パリに生まれ、

同地で没したフランスの画家・腐飾銅版画家である。

さて、初版は1867年パリで開催された万国博覧会の受賞作である。パリ万国博覧会の第1回は1855年に開催、1867年は第2回目にあたる。ジャクマンのこの本はおそらく文化教養部門の書籍出版コーナーに展示されたのであろう。この部門は見せ物としては地味であったが、文化史的には注目される内容であった。書籍出版コーナーは第2回目から独立して設けられたが、このコーナーの新設はフランス社会の文化状況の変化をそのまま現している。すなわち、第1回の万博以来、約10年のあいだに製紙・印刷製本の技術的推進や、また鉄道駅の売店で本を販売するなど流通をも含めた出版革命によって、低価格で大部数の本を出版することが可能になった。標題紙に「セピア版 150 フラン、カラー版 300 フラン」と告知しているが、これまでの書籍の価格と比較するとだいぶ安価になっており、その後の服装史文献の量産化を迎える要因の一つとなった。

本書はタイトルからみると服装史全般を扱った通史のようであるが、各時代に収録されている図版枚数からみて、17世紀から19世紀前半までの近代が主体となっている。

17世紀末は、現在私たちが着ている一般庶民の市民服が芽生えてきた時代である。紳士服背広のルーツもこの頃にさかのぼることができる。1870年代ではフランスにおいてもフロックというイギリス風の上衣が市民の間にも現れ、実用的で機能性のある現代的な衣服へとかたちを整えていく。このように今日の男性の衣服はイギリス軍服の影響を多分に受けている。また、この時期の衣装は服装が貴族中心から市民へ移行行く過程を示すもので、男子服の服装史上、特に意義深い。一方、婦人服の方はどうであったか。女性の市民服が現れるのは紳士服よりも遅れるが、紳士服と同様イギリスの市民社会からの影響が大きい。スポーツ服の発生や19世紀中頃のアメリカ、ブルーマー夫人の提唱した、いわゆるブルーマーズ運動なども女性の現代服の進展に大きく関わっている。

さて、服装を眺めてみよう。下図 (plate 134) は「シルカシエンヌ」といい、くるぶしが見える軽快な衣装、1780年代に貴婦人のあいだにも流行した。まず、ヘアースタイルの大きいのに驚く。髪には綿を入れ、針金を立てて高くし、柔らかい布でできた帽子は頂上を膨らませてリボンでまとめ、羽毛やレース、花で飾る。(参考までに付け加えるが、当時シャンプーは上流階級でさえ3週間に1度位とか…。) 衣服の方はコルセットでウエストをしめつけ、鯨の鬚などでできたパニエの上にビロードや羽毛の装飾がついたローブを着る。かかとの高い爪先の尖った靴。こんな恰好でほんとうに歩けたのであろうか。(平井)

